

うずみ火

植田多喜子

最愛の人を失っても——

あなたは独りで生きられるか？

灰に埋もれた
小さな火

“うずみ火”

のように

燃えつづけた

女のいのち

逝った人への

思慕を秘めて

孤独と闘いながら

半世紀を

生きぬいた

歌びとが、青春の

苦悩と

真実を語る

うざみ火

植田多喜子

＜著者紹介＞

植田多喜子（うえたきこ）

明治29年6月11日生れ、山口県出身。

大正2年、お茶の水女子大学国文科入学。

大正6年同大学を卒業。

大正10年6月6日、在学中に婚約した小林純三氏と結婚するも、7日未明、小林氏は肺結核のため死去。

昭和2年『春宵恋を思う』が女性改造に入選。同年4月、夫純三氏の7回忌に、第一歌集『久遠の塔』（三秀社）を上梓。

昭和10年、歌人植松寿樹門下に入る。昭和30年9月、第二歌集『新葉（にひわら）』（沃野社）を上梓。

昭和41年7月、第三歌集『落葉の日記』（新星書房）を上梓。現在にいたる。

現住所 茨城県西茨城郡岩瀬町今泉



う
ず
み
火

昭和四十七年三月二十五日 初版発行
昭和四十七年四月二十日 第四版発行

◎著者 植田多喜子

裕也

紅 仙石出版社

旧区大京町一五（〒一六〇）
京（〇三）三五九一〇五五五
一六一一〇三九

編

円

えします。△換印省略▽

5095-19295-3984

う
ず
み
火

紀世へ

紀世^{きよ}、このささやかな本に紀世の心が向いて手にするころは、もう大きくなっているだろうから、自分の幼なかつたころの記憶はないかも知れないが、紀世にはこんなことがありました。

それは、わたしが落合の家へでかけていったとき、紀世もパパとママと三人づれで、喜多見から会いにきてくれたときのこと、わたしの膝の上にえんこして「かいぐり、かいぐり」のおけいこを始めたところ、二つの腕の、くるくる回しは、なかなかできないが、「とつとの目」にくると、左の掌^てを、右の人指しゆびで、チョンチョンと三つつくところは、すぐに覚えて、二人で、きやあきやあいつて遊んだのだが、

「この次きたときには、ゲンコツ山の狸^{たぬき}さんをして遊ぼうネエ」

と、わたしがいうと、紀世は、

「ハイ」

と、返事をしたのです。

わたしはびっくりしたが、ママもパパも栄子お祖母ちゃんも寄ってきて、喜んで笑っていた。

まだ、もののいえない紀世が、どんな言葉よりも先に、人間の言葉として、第一番に覚えたのは、「ハイ」という言葉だった。

そう思ったとき、こんなよい子を、わたしは、食べてしまいたいほどいとしかった。

紀世のママが、さわやかな声で、きつといつもパパに、

「ハイ」

と、いつているのであろう。紀世の身边に、一番たくさんある言葉ではないだろうか。

いつの間にか、それが紀世の最初に覚えて、最初にいえる言葉になったのだ
と思い、膝の上の紀世の、おちよ、ぼ口の顔を見つめながら、わたしは、ホロッ

と涙がこぼれてしまった。

「ハイ」はよい言葉。

平和な言葉。

一番うつくしい言葉。

紀世の落合のお祖母ちゃん、わたしが「栄ちゃん」と呼ぶ、あの紀世のお祖母ちゃんは、わたしを「叔母様」というけれど、母親に対すると同様の^{つか}仕え方をするので、いきおい、紀世のパパもママも、また、和夫叔父ちゃんも、わたしを「お祖母ちゃん」と呼ぶので、紀世には曾祖母^{ひいばあ}ちゃんになりました。

ひいばあちゃんが七十七

紀世が数えの二つ

「ハイ」を最初に覚えた紀世。

紀世よ、その紀世へ、ひいおばあちゃんは、書き遺すつもりで、この長い話を書きつづけようとしています。

紀世もやがて大きくなると、きっと心の底から慕わしくてならない人が目の前に現われ、苦しい思いにとらわれたり、楽しくて心も躍るような日々を過ごすようなところが、音もなく季節のように訪れてくることであろう。ちょうど、冬の間、枯色をした草生や木立が、やがてまた暖かな陽ざしを浴び、土がぬくもり、小さなつぼみを結んで花が咲き始めるように。でも、その花は紀世ばかりでなく、誰のものでもあるのですよ。

紀世が高校へ入るころには、もうとつくにわたしは亡くなっているが、一生懸命に書いておくこの文は、わたしの声だと思って読んでください。

う
ず
み
火

目

次

紀世へ

第一部

髪は血に咲く花

あっぱい様 13

月が出るまで 29

あべのせとめ、
安倍女郎 49

夢の国のアリス 69

あづま乙女 91

小壺の人 107

第二部 青い川

紫野大徳寺聚光院 125

吉野川 149

メロンの露 173

第三部 うずみ火

寝違^{あいたい}としてわれの天地^{あめつち} 189

木乃伊^{みい} 217

白山吹 233

銀河系 265

花の恋占い 285

題字 寺元竹水
装幀 マツド・アマノ

第一部

髪は血に咲く花

あっぱい様

一人歩みの半世紀の余、笑うときにも、知らず知らずに、泣くような表情が顔に出てくることを、ふと歩きながらのある硝子戸^{がらす}に見て、伴^つれだつて行く友人には、興^がをさめさせるほどに、笑いのとまったこともある。

心の奥に、うずみ火のように、「小壺^{つぼ}の人」の言葉と心が、ほんのりと燃えながらかくれている。

それが、うれしくて、温かくて、悲しい。

それがかかえるわたしの日々。

そうして、いつの間にやら五十余年——

わたしは、弱く生れて産うぶごえさえも上げなかったことですが、それでも、三人目がまた女の児だったので、父上はひどく落胆なされて、手討ちになると、床の刀懸かたなかけから、一振取ひとよりって起たれたので、お祖母ばあ様が、抱いて逃げられたということです。

お蔭で、手討ちはまぬがれたけれど、何ともひ弱い児で、人なみに姉妹たちと走っては遊べなかったから、四六時中、お祖母様に守られて暮らしました。

小学校を六年して、女学校へ入ったのだが、一里（四き）ほどの道の往復が、やっとで、それも、学用品いっさいは学校に置きつきりで、傘かさを杖つえに、身ひとつでの通学だったが、全身疲労という病名で、とうとう臥ふせりこんで、欠席がちになりました。

なめるように、なでるように、小さいばば様がめんどろ見てくだされながら、口ぐせのよう
にいわれた。

「可愛い嫁女よめじよになった姿を見ぬうちは、ばば様は死ねんぞや」
わたしの、可愛い嫁女の姿を見ることが、ばば様の生甲斐いきがであったようで、そういつては、病床のわたしを励ましてくださった。

小さいばば様は、天保十年生れのお方で、江戸時代の言葉で、しつとりと話されるお方であ